

三菱ガス化学株式会社「2023年度決算説明会」質疑応答要旨

日時 : 2024年5月10日(金) 17:00 ~ 18:00 (ウェビナー/電話会議)

説明者 : 代表取締役社長 / 藤井 政志

取締役 常務執行役員 経営企画管掌、CSR・IR 担当 / 北川 元康

財務経理部長 / 近藤 亨成

(本資料に関する注意事項)

本資料については、上記説明会での質疑応答について、加筆・修正を加え、当社の判断で簡潔に纏めたものであることをご了承ください。また、説明会資料同様、記載されている計画、目標等の将来に関する記述は、説明会当日現在において当社が入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいて判断したものであり、不確実性を内包するものです。実際の業績等は、様々な要因によりこうした将来に関する記述とは大きく異なる可能性があります。

Q1: トリニダード・トバゴの減損損失について、御社の持分法投資損益におけるインパクトが74億円という理解で良いか。また今回の減損損失の背景は、他のメタノール生産3拠点で同様の減損はなさそうか。

A1: ご指摘の通り74億円は当社持分法損益への円ベースでの影響額である。減損要因として、他拠点と比較したトリニダードの特殊性がある。一つ目は販売ポートフォリオ上の問題。詳細は申し上げられないが主な販売先地域の市況が昨年は非常に悪く、かつ輸出の物流費も高騰した。二つ目はガス契約上の問題で、昨今のメタノール市況では、ガスコストとメタノール売価との間で十分なスプレッドが確保できない構図になっていた。他の拠点ではそのようなことはなく、今中計でもしっかりと利益を上げていく計画になっている。三つ目として、トリニダードは操業開始後まだ間もなく固定資産の簿価が非常に大きかったことも挙げられる。

Q2: フィルシート大阪工場撤退のシート・フィルム事業へのインパクトは。またPC事業の構造改革について今回発表の中計に記載されているが、詳細を教えてください。

A2: フィルシート大阪工場は既に撤退を決め、準備に入っている。今期はまだ苦しいが2026年度に向けては2桁億円の改善を図っていかねばならないと思っている。PC事業の構造改革については5月17日の中計説明会でご説明したい。

Q3: 電子材料は前期も販売が回復しているが、今期は更に上振れという形になっており、無機化学品も更に成長する形になっている。ウエハーの販売数量はなかなか回復していないが、BT材料やOPE、半導体薬液は、先端プロセスでの使用量が増えることやAI関連でOPEの需要が出てくることなどから順調に拡大する計画と理解してよいか。或いは何かリスク要因はあるのか。

A3: BT材料は前期も四半期毎に売上が着実に回復した。今期も用途全般で販売増を想定しており、上期が悪かった前期と比較するとYoYでは大きな伸びを見込んでいる。業界では、需要の本格回復は7月以降と言われており、1Qは回復途上の可能性がある。2Qに本格回復し、3Qがピークではないかと見ている。またAI搭載スマホ等の買い替え需要もBT材料の需要喚起にはプラスと考える。伸長しているOPEも、AIサーバー向けに引き続き堅調に推移すると見ている。

無機化学品のエレケミ(半導体薬液)は、前期は需要全般に弱さが続いたが、海外子会社での様々なコスト改善の結果、前回予想比では増益で着地できた。加えて韓国ユーザー向けではHBM等の新分野向けにハイブリッドケミカルの需要が増加した。足下は需要が弱い、日本、韓国、台湾、アメリカと、新ラインでの採用は着実に進んでおり、超純過酸化水素等の需要は伸びていくとみている。配線の微細化や製造工程の複雑化によって、一つの先端fabで使われる薬液の使用量は増加する傾向にあり、今期以降はBT系とともにエレケミが利益の牽引役となることを期待している。

Q4: 半導体薬液は、チップ在庫が依然残っているなど前工程が弱いことから回復が遅れている一方、最先端用途、AIサーバー等を中心に電子材料BTとOPEは先行して出ているようなイメージでよいか。そうであれば、7月頃からウエハー投入が増えてくれば、半導体薬液もHBM向け等を中心にさらに拡大というイメージだと思うが、そのような考え方で合っているか。

A4: そのような認識で良いと思う。付け加えると、当社の半導体薬液の最大ユーザーである北米顧客の需要がまだ弱いというのも背景にあるが、結果的に前期は、前工程に使われる薬液は後工程に使われる BT 材料よりもやや弱かった、ということになるかと思う。

Q5: 前期と今期で BT 材料と OPE の成長率はどれくらいと見ているのか。BT 材料はスマホが牽引する理解で良いか。AI スマホが出てくることによる因数増も見ているのか。OPE に関しては PCB の顧客のシェア変動要因はどのように業績予想に織り込んでいるか。

A5: BT 材料は前期から今期に向けて金額ベースでは強気に見ている。前期の 1Q、2Q が悪かったことを加味すると決して不思議な数字ではないと考える。汎用材、低熱膨張材、高周波、拡販を進めている BGA 向けなど、需要全般の伸長を期待している。ボリューム的に大きいのはスマホ等の低熱膨張材であり、ここは今期以降も牽引してくれるだろうと思っている。OPE について、AI サーバー市場は成長率 200%とも言われており、当社顧客からのフォーキャストでも強い需要予測が出てきている。サプライチェーン上のボトルネック懸念や在庫形成の懸念も踏まえ、市場の見方よりやや保守的に今期は組んでいるが、当社としても YoY で増収増益を見ている。

Q6: OPE は非常に高いシェアを維持できるという理解で良いのか。また BT の低熱膨張材は単純なスマホの伸び以外にプラスアルファを見られるものはあるか。例えば高機能化による恩恵などはあるか。

A6: OPE は、広く類似の材も入れると当社のシェアは小さいが、当社が強い分野が取られるという動きは今のところはないと認識。当社 OPE の顧客がエンドユーザーからどう評価されているかにもよるが、いずれにしても当社が守ってきた分野では特段の大きな変化はない。BT 材料の低熱膨張材は、データセンター向けメモリー等の回復も織り込んでいる。

Q7: BT 材料も広義では、例えば AI サーバー等の恩恵を受けていることになるのか。

A7: BT 材料にとっても、AI 関連の普及・進展は追い風だと思っている。

Q8: 資料 15 ページの今期の増減益要因に関してお伺いしたい。「その他」の▲256 億のうち、JSP の非連結化が▲64 億であり、実質▲192 億円の減益要因があるが、どういったマイナス要因があるのか。

A8: 大きいところでは、修繕費が大幅に増える。今期より修繕引当金を導入し、アップフロントで来期・さ来期分を含めて引当金を計上した。これに加え、今期は大定修年でもあり、修繕費の増加が一番大きい要因となっている。また減価償却費も、これまで大きな投資を続けてきたため JSP 要因を除けば増加している。

Q9: 修繕費は今期増えるが、来期・さ来期に関しては段差として落ちることになるのか。

A9: 今期から、来期・さ来期と漸減していくイメージである。

Q10: 欧州 MXDA の開業費計上は今期も続くのか。

A10: 今期も開業費の計上を予定している。

Q11: 芳香族化学品の営業利益の今期予想(対前期比)について、JSP が連結から外れることによるマイナス効果が▲64 億円ある中で、今期の減益幅が▲40 億円程度に収まっている。MXDA の欧州拠点開業費や定修費等も重い中で、この計画となる背景は。プラス側の要因も含めて整理してほしい。

A11: マイナス要因のうち半分程度が JSP の営業利益剥落要因であり、その他には、芳香族化学品の主たる拠点である水島工場の修繕費が引当金も含め YoY で約▲20 億円増加することや、MXDA 欧州拠点の開業費用計上、昨年度稼働を開始したアルデヒド装置の償却費増等が営業利益の圧迫側の要因となっている。一方、MXDA やアルデヒドは前期に特に欧米での需要が悪かったが、ようやく需要回復を見込める状況になってきた。在庫整理が終わってモノが動き出したと聞いており期待している。そのほか、MX ナイロンやキシレン分離/誘導品も増益で見ているが、全体ではマイナス要因の方が上回る計画。

Q12: 主要製品群別セグメントの機能化学品は前回予想に対して実績が上振れて着地したが、無機化学品、エンジニアリングプラスチックス、光学材料のうち何が貢献したのか。

A12: 最も大きく改善したのは無機化学品のエレケミ。まだ全般的に需要は弱い、海外子会社でコスト改善を進め増益となった。エンプラは POM が前回予想よりやや下振れたが、PC はタイ子会社が堅調に推移し、コスト改善もあり上振れとなった。光学材料は良い状況が続いており、前回予想並みに着地。

Q13: 芳香族の修繕費について。従来は毎年 4Q 定期修繕で大きく利益が減少する傾向があったが、引当により今後は平準化されるのか。費用面と販売数量面との両方から伺いたい。

A13: ご指摘のとおり、主に 4Q に、大定修と小定修を隔年で行っている。修繕費についてはできるだけ広い範囲で平準化をしていく方針だが、対象とする装置や工事は峻別する必要がある、全体の 7 割程度を平準化する計画。販売数量は定修前後の在庫管理等もあるため、一概に平準化するとも言えない。

Q14: 今期修繕費は、修繕引当金を含めると前期比でいかに増加する見込みか。

A14: 50 億円～100 億円程度、増加する見込みである。

Q15: OPE について、今期売上高の変化率としては何%程度の伸びを織り込んでいるのか。

A15: 売上高について、単価要因よりも数量要因の方が大きく、対前期比では 2 桁の伸びを想定している。

Q16: 配当方針について、今回の中計で累進配当方針を導入したということは、事業再編などの取り組みにより業績の変動性低減を達成することができるという、自信の表れと理解してよいか。

A16: ご認識の通り。これまでの投資案件の刈り取り時期であり、今中計期間の 3 カ年で確りとその成果を回収することができると思っている。

Q17: 今期はエレケミの利益が大きく伸びる予想となっている。多額の投資により償却負担も重くなっていると想像するが、利益率が上昇しているように見える。先端のメモリー向けなどで付加価値が上昇しているという要素もあるのか。また、地域別にみた場合、特に今年度伸びると想定している地域はあるか。

A17: エレケミは契約や採用がほぼ内定している顧客が確実に目の前にあり、投資の刈り取りという意味でも中計最終年度に向けて当社グループ全体を牽引していく見込み。今期は地域別には、北米が下期から需要の本格回復を見込む。韓国はメモリーの回復が遅くとも下期から本格回復すると想定しているほか HBM 向け等もプラス影響が出てくると考えている。その他、台湾の先端半導体向けや、日本の状況も活気づいており、超純過水や超純アンモニア水だけではなく、ハイブリッドケミカルも含めて増収増益を想定している。

Q18: 中計期間でも、エレケミは BT と並び収益を牽引するという認識で問題ないか。

A18: ご認識の通りである。

以上